



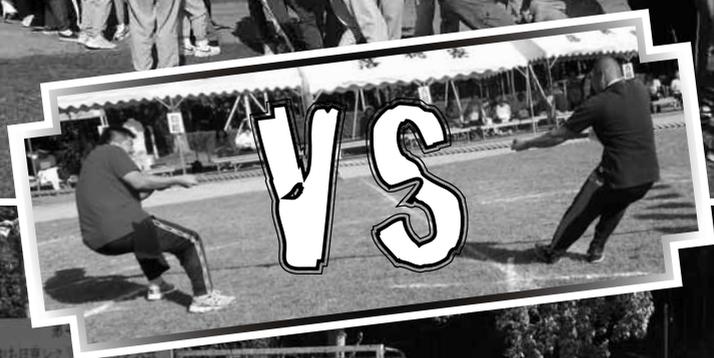
# おちほ

第74号 平成24年11月15日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 太田 正 則  
TEL 0748-77-2299 FAX 0748-77-5588 <http://ochiho.noor.jp/>



## 第44回

### 白組



### 紅組



今年も無事にレクリエーション大会が開催されました、大会前日の夜に雨が降っていたこともあり、今回は中止かとも思われましたが、当日は嘘のように晴れ、皆さんの楽しそうな生き生きとした笑顔を見ることが出来ました。

午前の種目は毎年恒例の徒競走。午後からの種目は綱引きや玉入れ。紅白対抗として落穂拾いとパズルゲーム、ダンスを実施しています。

利用者さんは御家族の方と一緒に競技に参加し、一緒に時間を過ごせたことにも喜びを隠せない様子でした。このような貴重な行事を今後も大切にしていくことが出来ればと思っています。

そしてレクリエーション大会自体も無事に終えることができ、これも利用者さん・御家族・来賓・職員の方々の協力があったことだと思っています。本当にありがとうございます。また来年の開催、そして皆様の来寮を心よりお待ちしております。

## レクリエーション大会

# 伝え残すことは何か

理事長 山下陽一

## 糸賀先生の没後

私は糸賀先生がお亡くなりになった後、一九七三年四月、落穂寮に勤務し始めました。落穂寮が旧石部町に移転して二年経過してのことでした。糸賀先生は一九六八年九月一日にお亡くなりになっていますので当然お姿を拝したことはありません。

私は歴史上の人物に敬称を加えるべきではないと考えていますが、私の知り合いには先生から直接に薫陶を受けた人たちがたくさんいて、皆さんが「先生」といっておられるなか、歴史上の人物のグループに押し込めるのはいささかふさわしくない思いを都度経験したものであります。歴史上の人物なのですが、思いとしてはリアティーが濃く、厳しさのなかに特殊な尊敬や懐かしさに包まれて「先生」と称している人たちの中では「先生」と敬称するほうが違和感がないようです。

一九七八年九月、先生没後十年の記念行事がおこなわれました。タイトルは「糸賀一雄先生物語十年記念講演会」。動員されて参加したのですが、当時の厚生省翁事務次官の講演はまったく記憶にありません。ただ、冒頭岡崎先生の司会で糸賀先生の肉声テープが流されたこと、田村先生の閉会のあいさつなどは部分的に記憶に残っています。

一九九四年五月「糸賀一雄没後二五年記念講演会」、二〇〇八年一月「糸賀一雄没後四〇年シンポジウム」は企画段階から参加しました。このように考えるとき、私が関係した約四〇年ほどの間、福祉や教育のシステムが大き

く変わる現場に臨んでいて、自分は何を果したのだろうかとも心もなない思いです。

## 生誕記念事業

一九一四年三月二十九日に糸賀先生がお生まれになって百年の記念事業を実施する計画が次第に具体化しています。滋賀県をはじめ湖南市、近江学園、民間法人などの福祉の枠を越えた団体が合同で企画推進するものとなりますが、今まで行った没後記念事業とは異なり、それをより広範囲に呼びかけようという企画です。

今日、障がいに対する歴史的な経過から政策論、現場の障がいに対する支援理念など、力や方向の違ったベクトルが複雑に交錯し、その歪みが露呈しているのが現状だと思います。まさに今、敗戦直後物心両面の乏しい中出発した近江学園の思想と実践を振り返ることは、この重層化した混迷から抜け出て今後の福祉のあり方を示す『コンパス(羅針盤)』の役割を果たすのではないかと思います。

## その遺産―三つの果実

近江学園の実践の中から「残さなければならぬモノは何か、伝えなければならぬコトは何か」について探ったとき、基本的なこととして次の三点を挙げることができるのではないかと思います。

### 1 「この子らを世の光に」

糸賀先生没年と前後するのですが、「煉獄のクリスマス (Christmas In Purgatory) Web でヒットします」)としてフォト・アルバムが発表されました。一九六五年のクリスマス、アメリカの大規模、隔離、重い扉、鉄格子などに象徴される施設収容の実態に世界の人々は強い衝撃を受けました。その各々は実態を告発するために密かに撮影されたものとは思えないもので、棺玉に挙げられた施設はその内情に日々埋もれ本来あるべき姿に感覚が鈍くなったために見落とされたものかもしれません。歴史的に「閉鎖的施設収容は処遇として一般的でした。糸賀先生はこの一般的考え方に一石を投じました。それは障がいの程度に関わらず、人としての本質の回復を「個性的自己実現」によるものとして終生訴え続けられました。その思想が簡明に「この子らを世の光に」として表現され社会に広く浸透したのです。これは知的障がいを持つ子の見方について根本的な「問いかけ」を発しました。私たちが「この子ら」の持つ問題を追及して解決するという方法ではなく、私たちが障がいを持つ子どもを受け入れる基本的な姿勢を問われている。「私たちがこの子ら」を問うのではなく「この子らから私たちの在り方が問われている」そして、この問いに私たちの全存在をかけて応えなければならぬ、というものでした。これは伝統的な観点を一八〇度転換した革新的意義を含むものでした。

### 2 人格の発達保障

重度の知的障がい、重症の心身障がいを持つ子どもたちはひとり一人かけがいのない生命を生きています。その生き抜こうとする必死の意欲を持ち個性的な自己実現をしています。この子らが生まれながらに持っている人格発達の権利を徹底的に保障しなければならぬ、また、障がいを克服していく努力のなかにその人格が

### 3 福祉圏構想

糸賀先生の没後十二年、厚生官僚の辻さんが滋賀県の社会福祉課長に着任されました。後に厚労省の事務方のトップ事務次官に任じられた方ですが、当時、滋賀県社会福祉計画の策定をすすめました。(参照「滋賀県の福祉を考える」―歴史と実践の中から―)

これによると、辻さんは着任後、田村、池田、岡崎の諸先生を直接訪ね意見を聞いて回ったと述べています。そのなかに「これら三人の考え方や活動の共通の原点としてつねに糸賀さんの存在を感じつつ糸賀さんの著作などに接する中で、私なりに糸賀さんの福祉の思想というべきものを受け止め学んできたように思う。それは、福祉の倫理、論理、方法という一貫した体系である。(前掲「〇〇」と述べています。この「福祉圏構想」は県下を七つのサービス区域として、子ども、障がい、老人の諸問題の福祉ニーズとその圏域ごとに受止めるというものです。これは糸賀先生が直接に提示したものではありませんが、政策担当者が糸賀先生の思想と実践に福祉の一貫した体系を学びその中から産み出したものでした。この発展可能性を持つシステムは将来に向かっての政策課題として結実したといえるでしょう。全国に先駆けるシステム作りの「コンパス」として間違いなかったことを、また、後世に重要な影響を与えた果実の一つといえるのではないかと思います。

(二〇二二・一〇・一五)

# 「視点は三百六十度」

施設長 太田 正 則

滋賀県で起きたいじめ問題への対応がきっかけとなり、これまで課題を避けて通ってきた無責任な大人たちが自分の非を認めて少し行動し始めたような印象を受けます。「自覚者が責任者」という言葉を残された、もうすぐ生誕百年を迎えられる糸賀一雄氏は現在の日本の教育者をどのように見ておられるのでしょうか。

「いじめている君へ」(二〇一二年・八・一六付け朝日新聞)に春名風花さんの思いが載せられていました。

「(前略)いじめを止めるのは、いじめる子に想像力を持つてもらうことでしか止まらない。想像してください。君があざ笑った子が初めて立ちあがった日、初めて歩いた日、初めて笑った日、うれしくて泣いたり笑ったりした人たちの姿を。君がキモイ・ウザイと思っただ人を、世界中の誰よりも自分の命にかけても愛している人たちのことを。」というものでした。

別の紙面の「信じて多くの言葉」(二〇一二年・一〇・三付け朝日新聞)

では、言葉を持たないと思われる重度の障害のある男の子が、国学院大学柴田教授が改良したかすかな手の筋肉の動きで文字を選ぶことが出来る文字入力スイッチで、男の子が言葉を持つことを周囲に認知してもらうことが出来たことの重大さを伝える記事の中に、

「重い障害で、はい、いいえ、とも言えないため、赤ちゃん程度の発達段階とみなされる人もいる。だが多くは言葉を持っている。(中略)意思を持ちながら認められないのは、人間としての存在を否定されること。その恐ろしさを想像してほしい。」とありました。このどちらにも人として身につけて欲しい力として共通するのが「想像力」です。

平成二十五年四月一日、障害者総合支援法が施行になります。その中では個人が尊重された共生社会を実現するために

一、身近な場所での支援と社会参加の機会の確保

二、どこで誰と生活するかについての選択の機会の確保と、誰もが住みたいところで生活できる地域社会にするために障壁となるものを取り除く

という理念が掲げられています。一部は経過措置として平成二十六年四月一日に施行となりますが、障害者の範囲に「難病等」が含まれ、現在の医学モデル基準の障害程度区分認定は社会モデル基準の障害支援区分に改められます。それと同時に施行後三年を目途として検討規定が設けられました。その中の一つに「意思決定支援のあり方」というものがあります。

さて、これまで皆様に紹介してきたように落穂寮の利用者さんの半分は言葉をもたないと理解され、もっていても自らの意思を伝達する力が弱い方が殆どです。「旅行に行きたい」や「コーヒーが飲みたい」など趣向的なことだけでなく、「喉が渴いた」や「お腹が空いた」など生命の維持さえ覚束無いのです。ある時、片方の踵を上げて歩いている方がおられ、不

思議に思っただけの裏を確認すると画鋲が刺さっていた事があります。また、足の甲が腫れっぼいので念の為にレントゲンをとると亀裂骨折していることもありました。このように激痛さえ伝えられない方たちの意思がどこにあるのかを知ることは大変困難なことです。私たちは日常生活を共にする中で僅かな違和感を見逃すことなく、そこに視線を向け、違和感の原因を探るべく観察し、そこから得られた情報から考えられることを考察して利用者さんの笑顔が見られるように支援しています。そのために必要な力は、やはり『想像力』なのです。体験したくてもできない世界が目の前にあります。かつてはそこを通過してきたけど忘れてしまった時代があります。私たちには、これまでの人生経験(見聞)を活かしてフルに想像力を働かせ、相手の立場に立った支援(教育)が求められます。自信を持ちながらもそれが確信に変わるまで。

人を育てるということは自分が育つことから始まります。自他共に育つ原点が彼らとのかかわりの中にあるのではないかと思っております。

# 第44回レクリエーション大会2012



有志

紅白対抗

徒走



玉入れ



**日課紹介展**

第二回目となった日課紹介展。これは、日頃利用者さん達がどのような活動に取り組んで頂いているのか、親御さんも含めて多くの方に知って頂く為に始めさせて頂いたものです。日課紹介展では、各作業班の日頃の様子を写真や実際に作業で使うものなどを展示して紹介させて頂きました。実際に出来上がった作品も手にとって見て頂き、様々な感想も頂きました。中には、「この作品欲しいわ」や「商品化してしまったら？」などの声も頂きました。これらの声を力に、これからの日課活動にも力を入れていきたいと思えます。多くの方に足を運んで頂き、ありがとうございました。



ダンス



綱引き

# 僕たち、私たちの納涼祭



八月の下旬に、落穂寮の納涼祭が行われました。天気にも恵まれ、着々とグラウンドにてやぐらや提灯などの設営の準備が進む様子もワクワクドキドキ、楽しむ気持ちをMAXに高めて待つておられました。

今年のメニューは、おにぎり・焼きそば・フライドポテト・焼き鳥・ジュース・お楽しみのゲーム(輪投げ)です。

落穂寮の納涼祭は、一見非常に地味な印象を受けますが、職員は職人に負けない気持ちで、焼いたり、作ったりし、本当の屋台の雰囲気を感じていただけるように努めています。そのやる気が利用者さん達にも伝わり、楽しんでいただけているのだと思います。

飾る提灯も利用者さんが絵を描かれ、その絵を毎年提灯に仕上げています。自分の絵が暗闇の中にキレイに浮かびあがる様子を見て喜ばれる利用者さんもおられ、言葉での意思表示が難しい利用者さん方に「喜ぶ気持ち」を感じていただくためにも、ホームメイドな落穂寮の納涼祭をこれからも続けていきたいと思います。

宜しければ、来年遊びに来てみませんか？



## ★地藏盆★



今年のお地藏盆も晴天に恵まれ、利用者さんたちは一年の無病息災を願ってお地藏様にお参りされました。なかなか待ち時間も長かったです。みなさん「まんまんちゃん」と唱えられてました。今年も一年みなさん元気に過ごせますように…



## 男子棟飯盒炊さん

今年の男子棟飯盒炊さんの場所は希望が丘運動公園のデイキャンプ場。天候に恵まれ、眩しいほどの日差しを浴びながらグラウンドでサッカーを楽しむ方々や、日陰の中で音楽を楽しむ方々とそれぞれの楽しい時間を過ごし、皆が心待ちにしていたお昼ご飯。大盛りのお肉、焼きそばをお腹いっぱい食べた後は、周辺の散策へ。近くには綺麗な小川が流れており、沢ガニを見つけて捕まえて遊ぶ姿や芝のグラウンドを嬉しそうに飛び跳ねて走り回る姿に職員も嬉しくなり一緒に遊んで遊び回っていました。帰りのバスでは、遊び疲れて少しグッタリされていますが、それだけ楽しんでくれたのだと思います。次回もみんなで楽しい飯盒炊さんにしていきましょう。来年もまた良い天気に恵まれますように。

食べた後はみんなでサッカー!!



今からご飯食べまーす!



美味しいカレーはできたかな?

## 女子棟飯盒炊さん

今年も落穂寮の夏の風物詩、飯盒炊さんが行われました。女子棟は今年も昨年と同じく、寮内での開催となりましたが、利用者さんは気にされることなく、プールやドライブ、ビデオ鑑賞をそれぞれ楽しみながら料理が出来あがるのを待つておられました。

今年のメニューはカレーライス、フランクフルト、ホイール焼きです。カレーライス以外は一人一つと数が限られていましたが、それでもみなさんカレーライスを沢山おかわりし、満足そうな笑顔を見せて下さいました。

食後は再びプールにドライブ、あとは体育館裏でのんびり日なたぼっこをされている方もいました。そしておやつにはフルーツポンチを食べました。暑い日差しの中で食べる冷めたいフルーツポンチは体内に染み渡るようで、とても美味しく感じられました。やはりこちらも我先にとみなさんおかわりをしておられました。

今年もおなかいっぱい、笑顔いっぱいの飯盒炊さんになりました。来年も晴天の中で美味しくご飯が沢山食べられますように。

